



出口



のない



筏の上で、

17才は



五平餅の



夢

を見る



サトウシヨイキ

出口のない筏の上で、十七歳は五平餅の夢を見る

出口のない筏の上で、
十七歳は
五平餅の夢を見る



はじめに

本作は祖父の戦争体験をまとめた小説（「満月は影を忘れない」）を基に、より短く、物語としての演出を強めたものとしてまとめたものです。

祖父の戦争体験を伝聞と調査により、より詳細に記した「満月は影を忘れない」はこちらからご覧いただけます。



目次

はじめに	3
第一章 潮の輪.....	5
第二章 銀の翼.....	15
第三章 灰色の背	23
第四章 白い海.....	33
第五章 半影の月	41
謝辞	54

第一章 潮の輪

舌が、口の中で石になっていた。

いかだ
筏が持ち上がるたび、腹の下で丸太が軋^{きし}んだ。
丸太の下では、波を受けたドラム缶が鈍く鳴った。
波間へ落ちると、今度は水平線が頭上へ跳ね上がった。頬に貼りつく空気は夜になっても生ぬるく、昼間に焼かれた皮膚の奥から熱が抜けない。塩水を吸った袖^{そで}が腕を重くしていた。

筏は、縦二メートル、横三メートルほどしかなかった。僕のほかに八人。誰かが脚を伸ばせば、別の誰かが膝を胸へ引いた。右肩には結び目の硬い縄が当たり、左の腿^{もも}には隣の男の踵^{かかと}が触れていた。波が来るたび、その触れ方だけが変わった。

爪の割れた手。膝を抱く影。止まらない咳。水筒を振り、音がしないのを確かめる男。顔が見えなくても、八人がいることは分かった。

水筒の男が栓を外した。逆さにしても一滴も落ちなかった。隣から手が伸びると、男は空の水筒を渡した。容器は順に回り、僕の番には金属の縁に塩の味しか残っていなかった。

振り返ると、夜と海の境に、低い影があった。筏はそこを離れたはずなのに、朝になると影は近くなった。昼には右へ動き、夕方には左へ戻った。

結び目の男は、島影の端を指で測った。別の男は布の切れ端を丸太に結び、風向きを見た。ド

ラム缶を叩いて音を出す者もいた。翌朝も、島影は同じ指の幅に収まっていた。海流は沖へ運ぶふりをして、筏を見えない輪の上へ戻した。

それでも男たちは縄^{なわ}を締め直した。布を高くした。水筒を日に当てないよう腹の下へ隠した。何かが海の向こうから来たとき、声を出せるように喉を休めた。

島へは進めない。結び目の男は縄を締めた。船は見えない。爪の男は布を濡らさず抱えた。誰も助かるとは言わなかった。塩で割れた指だけが、次の結び目を探した。

太陽が何度昇ったのか分からなくなった。咳の男は咳をしなくなった。唇の切れた男が何かを言ったが、乾いた口は音を作れなかった。

隣の男が左の眉を二度こすった。祖父の古い写真にも、眉の上に白い傷があった。そう思った次の朝、その指は眉まで届かなかった。

僕は男の手を握った。熱いのか冷たいのかも分からない。八人分あった呼吸は、波が来るたび一つずつ遠くなった。最後に残ったのが僕の呼吸なのか、海が丸太とドラム缶の隙間を抜ける音なのか、聞き分けられなくなった。

島影だけが、同じ場所にあった。



午前四時十二分、僕は床に倒れ、両手を何かをつかむ形に固めていた。海は消えても、悪夢の

続きが部屋の暗がりに残っていた。

八月十一日の昼、机の上には進路希望調査票があった。第一志望の欄^{らん}にシャープペンシルの跡だけが残っていた。

数学は、成績表を見て困らない程度にはできた。好きなことより、社会の役に立ちそうなものを先に考えた。数字を使いそうな経済学部と、数学を使いそうな工学部。どちらにも強い理由はないまま、資料を請求していた。

経済学部の案内には企業名や就職^{しゅうしょくさき}先の一覧があり、工学部の案内には研究室と装置の写真があった。数字を扱う仕事。物を設計する仕事。説明を読めば読むほど、卒業した僕がどこで、誰と、何をして働いているのか見えなくなった。

どちらかを書けば、紙がその先の人生まで決めるように思えた。担任には第一志望は一つだと言われた。第一志望の欄だけが、僕より先に将来を決めたがっていた。数字の一が、紙の上で細い杭のように見えた。

僕は床に落ちていた写真を拾った。父方の祖父を含むらしい男たちが、まぶしそうに並んでいる。祖父が亡くなったのは僕が三歳のときで、^{ぶつだん}仏壇の前で膝を鳴らして立ち上がる老人の記憶しかない。

母が麦茶を持ってきた。

「筏に乗ったのは、本当？」

「八人で出たって記録にはあるらしい。丸太とドラム缶で作った、二メートルに三メートルくらいの筏。潜水艦に拾われたって」

記録にはあるらしい。その二つの言葉は、くっついていて互いを信用していなかった。

「B29 を盗もうとしたのは？」

「それは、おばあちゃんがそう聞いたってだけ。
ごへいもち五平餅の話も。帰ったら仲間と腹いっぱい食べようって約束したんだって」

「お母さんは、おじいちゃん本人から聞かなかったの」

「私には義理のお父さんだったし、お嫁に来て

からも、戦争の話はほとんどしなかった。お父さんも、自分の父親なのに、もっと聞けばよかったって」

「どの人が言ったの」

母は写真をのぞき込み、首を振った。

「そこから先は分からない」

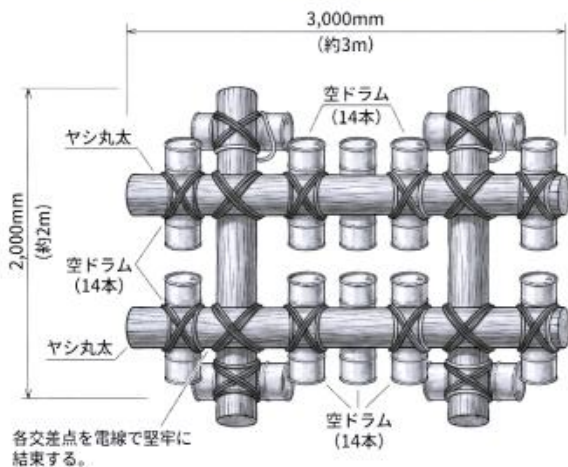
写真の縁は波打ち、裏には消した文字の跡が重なっていた。母の「分からない」は検索結果より短く、たいてい検索結果より正確だった。読めないものは、強くこすっても読めるようにはならなかった。

経済学部と工学部の案内を交互に開いたが、働

出口のない筏の上で、十七歳は五平餅の夢を見る

いている自分の姿はどちらにも現れなかった。
夜になって机に伏せた。目を閉じたつもりはな
かった。

筏 (イカダ) 設計図



第二章 銀の翼

油の匂いがした。

背の高い草の中に伏せていた。頬に土。日は真上。地面からも熱が上がっていた。壊れかけた建物の向こうに、銀色の飛行機が見えた。翼は建物より長く、四つの黒いエンジンを吊っていた。

草の葉で頬が切れ、汗が傷へ入った。僕たちは声を出さず、前の背中が止まれば止まった。遠くで低い音が続いていた。頬のこけた男は、そのたび地面へ耳を近づけたが、何を聞き分けているのか分からなかった。

「B29 だ」

頬のこけた男が、息だけで言った。

「あれを使う」

勇ましい声ではなかった。出口のない部屋で、壁の薄そうな場所を言い当てただけの声だった。

途中、屋根の半分ない家の前で、島の住民と出会った。その人は幼い子を背に隠し、落ちていた金属の棒を拾った。僕たちと同じくらい痩せていたが、道をあけなかった。

頬のこけた男が空の手を上げた。相手は棒を下ろさない。背後には割れた器と、踏みつぶされた葉と、片方だけの小さな靴があった。目の前の器を誰が踏んだのか、僕には分からなかった。けれど、子どもを隠させている側に僕たちもい

た。その人の目は、僕たちがここにいること自体を拒んでいた。

僕たちは迂回^{うかい}した。助けを求める者はいなかった。

飛行機まであと数十歩というところで、頬のこけた男が止まった。巨大な車輪の片方が潰れ、脚が地面へ沈んでいた。男は裂けたゴムへ指を触れた。

丸い機首の窓に空が映っていた。胴の中には八人でも入れそうだった。四つのエンジンは、どれも動いていなかった。飛べるかもしれないという考えは、飛べないと知る直前がいちばん鮮やかだった。誰が操縦するのか、その先に滑走できる地面が残っているのか。口に出されなか

った穴が、巨体の周囲にいくつも開いていた。

「飛ばせん」

男は裂けた車輪から手を離した。怒鳴る者はいなかった。機体を蹴る者もいなかった。選べるものが一つ減った音はせず、虫の声だけが続いていた。

建物の陰から、聞き取れない声が飛んだ。さっきの住民とは違う軍服を着た、米軍の兵士たちが現れた。僕たちへ伸ばした腕の先で金属が光った。頬のこけた男が両手を上げた。僕たちも従った。

振り返ると、さっきの住民は子どもの肩を抱き、家の奥へ下がっていた。足元には拾い集めた器

が重なっていた。こちらを助けることも、捕らえる側へ合図することもなく、自分たちの暮らしの中へ戻っていった。

夢はそこで一度、途切れた。

次に見えたのは、どこか屋内だった。向こう側から声が聞こえるたび、こちらから足音が遠ざかっていく。戻ってくる足音はなかった。七つ目の声のあと、眉をこする男が僕を見た。左手を上げかけたところで、白い光が顔を消した。



八月十二日の昼、僕は机に伏せたまま目を覚ました。四つの黒いエンジンが、まだ^{まぶた}瞼の裏に並んでいた。

ノートを開き、「B29」「米軍に捕まる」「白い光」と書いた。その下に二重線を引き、「夢。史実ではない」と付け足した。

夢にいた住民のことを調べた。グアムの先住民に、チャモロ人 (CHamoru) と呼ばれる人々がいることを知った。占領期を説明する資料と、そこで暮らした人々の記憶とでは、同じ島を語っていても輪郭^{りんかく}が重ならないところがあった。

僕たちを捕らえた米兵と、子どもを守っていた住民は、同じ島にいたというだけで、同じ立場ではなかった。

夢の親子が CHamoru だったかは分らない。名前も言葉も聞いていない。分らないものを、

調べた呼び名で塗りつぶさないよう、ノートには「島の住民。CHamoru なのだろうか」と書いた。

画面の中には、戦争の前にも後にも続く暮らしがあった。一つの説明で、そのすべてを同じ形に整えることはできなかった。夢で見た壊れた器だけを、その人々の全部にしてはいけなかった。僕は当時を伝えるページと、現在の文化についてのページを別々のタブで残した。開いたタブは増えたが、分かったふりをする余地は少し減った。

祖父の写真を光へ傾けると、眉の白い箇所は傷にも、紙の剥がれにも見えた。

進路希望調査票へ「経済学部」と書き、すぐ消

した。次に「工学部」と書き、それも消した。
調査票は進路より消し跡に詳しくなった。企業
で数字を見る自分も、機械の前で図面を見る自
分も、借り物の写真のようだった。

夜になってベッドへ入り、時計が日付を越える
まで目を開けていた。

第三章 灰色の背

熱い丸太に頬がついていた。また、筏だった。
三度目の夢になるだろうか。

昼の海は、目を閉じてても赤かった。二メートル
に三メートルの上へ八人が身体を折り畳んでいた。
頭に布をかぶった男、唇の端を切った男、
咳をする男、黙って結び目を直す男。爪の割れ
た手が丸太を押さえ、水筒を持つ手は空をつか
み、眉をこする男が僕の隣にいた。

結び目の男は、濡れるたび緩む縄を何度も締め
た。爪の男はその間、丸太が離れないよう腕を
差し込んだ。波が筏の底を叩くたび、ドラム缶
が空洞の音を返した。

僕は自分の役目を探した。何も見つからず、波が来るたび人数を数えた。八つの影に自分を足す。計算はできても、この世界の数字に足すことはできなかった。

夕方、唇の切れた男が腹を鳴らした。

「帰ったら、五平餅だな」

誰も答えなかった。男は懲りずに続けた。

「味噌^{みそ}は薄く塗るんじゃないぞ。垂れるくらい塗って、端を黒く焦がす」

「焦がしたら苦い」

水筒の男が言った。

「そこがうまいんだ。米は全部潰すな。少し粒を残す」

「それでは、おやつか飯か分からん」

「帰って食えば分かる」

帰るという言葉の口にしたあとだけ、全員が海を見た。島影も船もなかった。

海の真ん中に、そこには匂いが立った。甘い味噌。煙。焼けた米。僕はサービスエリアの袋から出された五平餅しか知らなかった。それなのに男の話す五平餅は、持てば指を火傷し^{やけど}そうだった。

「八本焼け」

咳の男が言った。

「おまえの分は焦げたところだけだ」

「なら、おまえの白いところと替えろ」

二人は、まだ目の前にない一本を半分ずつにした。結び目の男は縄を引きながら、「炭は俺が起こす」と言った。爪の男は割れた爪で丸を八つ、濡れた丸太に描いた。波が来て、すぐ消した。

笑いは長く続かなかった。笑うにも水が要るのだと、そのとき知った。

眉をこする男は黙っていた。やがて口元だけを

少し曲げた。写真の祖父に似ているか分からなかった。似ていてほしいと思った途端、顔は別人のものになった。

男たちは日が沈むまで、縄を確かめ、空の水筒を守り、布を乾かした。海の向こうに何かが現れたとき、布を上げられるように。声を返せるように。

海の下を、灰色の背が回った。

最初の一周では誰も口にしなかった。二周目に、爪の割れた手が丸太の内側へ引っ込んだ。三周目、三角のひれが近づき、筏の底を硬いものがこすった。ドラム缶が鳴り、八人の膝が同時に浮いた。

水筒の男が容器で丸太を叩いた。結び目の男は縄の端を握り、爪の男は布を水面へ垂らさないよう抱えた。唇の切れた男は、五平餅の話をしなかった。

僕の足首だけが海に浸かっていた。引き上げる場所がない。眉の男が膝を押しつけ、僕の足を水面から持ち上げた。その重みで反対側が沈んだ。

「サメだ」

丸太が激しく突き上げられ、世界が灰色の背中になった。

僕の足を支えていた膝が外れた。踵へ何かが触れた。確かめる前に眉の男が僕の胸倉を引いた。

二人分の重さで筏が傾き、今度は爪の男の肩が沈んだ。助けられるたび、別の場所が海へ近づいた。

丸太がもう一度持ち上がった。つかまっていた手を数えると、一本足りなかった。誰の手か確かめようとしたとき、海水が口と鼻を同時に塞いだ。灰色の背だけが明るくなり、音が消えた。



八月十三日の昼、僕は床に落ち、足首を両手で抱えていた。傷はなかった。けれど冷房の風が触れるたび、皮膚のすぐ下を硬いものが回った。

台所で麦茶を注いでいると、母が僕の顔を見て、夜更かし、とだけ言った。頷いておいた。床で

目が覚めたことは言わなかった。

ノートには「サメ」と書いた。八人の丸を描いた。いなくなった一人の丸は消すことができなかった。前夜の五平餅の話も書いたが、味噌の焦げ具合までは思い出せなかった。

悪夢は、起きたことを繰り返すものだと思っていた。けれど三晩とも、同じ八人が違う形で帰れなくなった。祖父の身に起きてもおかしくなかった結末を、僕は見ているのだろうか。その疑問にも二重線は引けず、ノートの端に残した。

午後、経済学部の新卒生紹介を読んだ。仕事内容の違う人が同じ学部から出ていた。工学部の案内にも、設計、開発、管理と別々の言葉が並んでいた。学部名から仕事が一本に決まるわけ

ではないらしい。案内冊子の卒業生は全員、僕より自分の将来に詳しそうだった。それでも、どの欄にも自分の顔は浮かばなかった。

その日は一ページずつ読み、気になった箇所へ付箋^{ふせん}を貼った。答えは書けなかったが、閉じずに机の左右へ置いた。

八月十三日の日付が終わるころ、自分でベッドへ入り、四度目の眠りを待った。

第四章 白い海

風から始まった。

雲が昼を消した。雨が横から皮膚^{ひふ}を打った。二メートルに三メートルの筏が持ち上がった。山の斜面を上り、向こう側へ落ちた。ドラム缶が跳ねた。縄が悲鳴のような音を立てた。

結び目の男は腹ばいになり、緩んだ縄へ両腕を巻いた。爪の男がその腰を押さえた。水筒の男は容器を放さず、唇の切れた男は布を身体の下へ入れた。明日、何かが見えたときに振るためだった。

咳の男の声も、木が裂ける音も風に奪われた。大きな艦さえ沈めそうな海だった。

一本の丸太が外れた。

結び目の男がそれを追った。爪の男は片手で男を、もう片方で残った縄をつかんだ。眉の男が僕の肩を丸太へ押しつけた。波の谷へ落ちるたび、八人は互いの位置を声で確かめた。

「いる」

「ここだ」

「まだいる」

声は短くなっても、途切れなかった。

唇の切れた男の口が動いた。五平餅と言ったの

か、誰かの名を呼んだのか、雨に消されて分からなかった。水筒だけが浮かび、筏より高い波の向こうへ消えた。

風が一瞬弱まると、離れた丸太に二つの影が見えた。布を上げようとしていた。次に雨が閉じたとき、そこには何もなかった。見えないことと、いないことの違いを確かめるすべはなかった。

足元でドラム缶の音が一つ消えた。筏が片側へ沈んだ。それでも爪の男は縄を放さなかった。どこかに朝が残っているように、全員が手を伸ばしていた。

白い水が、手も縄も影も覆った。



八月十四日の朝、僕はベッドの上で雨音を聞いていた。窓は閉まり、外は晴れていた。耳の奥だけで嵐が続き、しばらく天井が白い海面に見えた。

昼、ノートに「台風」と書いた。検索すると、十二月のコブラ台風が米軍の駆逐艦^{くちくかん}を三隻沈めたという記録が見つかった。祖父たちの筏がその台風に遭ったとは、どこにも書かれていなかった。夢の嵐と記録の嵐を、同じものにはできなかった。

祖父の名前とグアム、伊四十七を検索した。家にある話と似た言葉も、食い違う数字も出てきた。『「回天」―特攻潜航艇の青春群像』二百三

十四頁には、回天に乗る予定の中尉が八人の救助を頼み、その言葉で艦長が全員を救助した、とあった。本の記述と、夢で見たものは同じではなかった。

月食についても調べた。記録にあったのは皆既半影月食^{かいきはんえいげっしょく}だった。月全体が地球の薄い影へ入り、欠けないまま明るさを落とす。救出位置はグアム西方約三百海里。月食と救出位置を、ノートに書き加えた。

別の資料には、島から帰らなかった人々の名が縦に並んでいた。祖父の名前だけを拾えば、その列を思考の外へ追いやることができた。僕はどの窓も閉じず、一人ずつ読もうとした。途中で行を見失い、同じ名前を二度読んだ。

経済学部の説明会は土曜日、工学部は翌週の日曜日だった。日付は重なっていなかった。学部を選ぶ前に、そこで学ぶ人や卒業した人の話を聞くことはできる。

申し込みの画面を二つ開き、順に送信した。一通目の確認メールが届き、少し遅れて二通目も届いた。受信箱には違う日付の件名が二つ並んだ。

第一志望はまだ書けなかった。仕事をしている自分も見えなかった。それでも、説明会のほうは、僕の決心を待たずに申し込めた。会場へ行けば、今は知らない仕事や人に出会うかもしれない。

その夜、写真を机に置いたままベッドへ入った。

出口のない筏の上で、十七歳は五平餅の夢を見る

五度目の夢が来るなら、これが最後であってほしいと思った。エアコンの音が遠ざかり、次に聞こえた声は部屋の中からではなかった。

五平餅

つぶしたご飯を串に付けて焼き、
みそだれを塗った
香ばしい郷土の味。



第五章 半影の月

グアム西方、約三百海里。西の海へ、皆既半影月食の月が沈みかけていた。欠けてはいない。灰色の膜をかぶり、明るさだけを失っていた。夜がほどけた。八人の顔が青く浮かんだ。

丸太とドラム缶の筏は、夜露^{よつゆ}と海水に濡れていた。結び目の男は縄を締め、爪の男は水筒に布を巻いた。咳の男は丸太を蹴る力を残していた。眉の男は、倒れそうな唇の男を支えていた。

「おーい」

声がした。

八人の誰も口を動かしていなかった。もう一度、

遠くから声が来た。言葉は風に崩れたが、人がこちらへ放った声だと分かった。

「戦闘用意」

低い声が筏の上を走った。

水筒の男が容器を置き、服の内側から手榴弾を取り出した。安全具には触れず、胸の前で握った。ほかの男たちは身体を低くした。二メートルに三メートルの上に、逃げる場所はなかった。

月の下に、海そのものが盛り上がったような黒い影が現れた。長い船体が明け方の波を切っていた。鉄の上に立つ人影が見えた。

向こうから三度目の声が来た。今度は日本語だ

と分かった。

手榴弾しゅりゅうだんを持つ手が、すぐには下がらなかった。
唇の切れた男が返事をした。水筒の男は容器を
打った。相手の声がもう一度届いた。そこで初
めて、手榴弾を服の内側へ戻した。

潜水艦は一度、僕たちの前を横切り、遠ざかる
向きへ船体を傾けた。

前の夢で見た島影のように、そのまま小さくな
るのだと思った。唇の切れた男の声は風に潰れ、
水筒を打つ音も波に沈んだ。それでも結び目の
男は縄を締め、爪の男は布を高く掲げた。咳の
男は丸太を蹴った。

鉄の上で、若い乗員が上官らしい男に何かを訴

えていた。ほかの乗員がその肩をつかんだ。若い男は振りほどかなかった。ただ、筏を指す手だけを下ろさなかった。

潜水艦が速度を落とした。

あの手が艦を止めたのか、先に出ていた命令を追って筏を指したのか、僕には聞き分けられなかった。

鉄の上では、何人もの乗員が動き始めた。縄を運ぶ者、足場を空ける者、こちらを見て合図する者。誰の判断が最初だったのかは、動きの中へ紛れた。

近づいてから、誰かが「伊四十七だ」と息を吐いた。

縄が飛んできた。一度目は海に落ちた。結び目の男が丸太へ足を絡め、身を乗り出した。二度目の縄を爪の割れた手がつかんだ。潜水艦の乗員が引き、次の手、次の腕がそれにつながった。

筏を保ってきた縄が、今度は八人を鉄の上へつないだ。

僕の番が来るまで、ずいぶん時間がかかった。艦上へ引き上げられると、鉄板は夜露と海水で濡れていた。頬に触れると、海より少しだけ冷たかった。油と汗の匂いがした。

若い乗員の背後には、人の乗る場所とは思えない細長い艇が固定されていた。

若い男はそれを振り返らなかった。救い上げた男の肩を押さえ、次の縄へ手を伸ばした。彼が何者なのか、なぜ筏を指したのか、夢の中でも分からなかった。

七人目が引き上げられた。八人目は眉をこする男だった。

僕はその顔を見ようとした。海水と油で汚れ、目は腫れていた。左の眉の上に傷があるようにも、塩が乾いているだけにも見えた。

「あと一人」

縄が下りた。眉の男の手は届かなかった。僕は腹ばいになって腕を伸ばした。若い乗員が僕の腰をつかんだ。僕は眉の男の手首をつかんだ。

出口のない筏の上で、十七歳は五平餅の夢を見る

三つの手がつながった。

男が鉄板に倒れ込むと、唇の切れた男が呟いた。

「八本だぞ」

咳の男の口からは、「五平餅」と零れた。

眉の男がこちらを向いた。何か言ったが、機械の音で聞こえなかった。

帰れ、と唇が動いたように見えた。

この夜だけ、目を開ける直前まで八人分の呼吸が聞こえていた。



カーテンの隙間から朝の光が差していた。西へ沈む月も、潜水艦もなかった。シーツは汗で濡れ、右手は誰かの手首を握る形に固まっていた。

八月十五日だった。居間のテレビは終戦の日の式典を映していた。母は音を小さくし、仏壇の茄子と胡瓜を置き直した。短く折った棒の脚が、それぞれ四本ずつ刺さっていた。茄子は牛、胡瓜は馬だと、毎年聞いてきた。父の帰りは、今夜になるらしかった。

ノートには「海流」「B29」「サメ」「台風」が別々の頁に残っていた。どれも夢で、祖父に起きた事実ではない。その下に「伊四十七」と書くと、それだけが記録の側にあった。五度目も夢のは

ずだった。それでも、二重線は引けなかった。帰れない終わりはいくつも思いつくのに、帰ってきた道は一本しか残っていなかった。一本しか残らなかったことと、初めからそれしかなかったことは、違う気がした。

机の左右には、経済学部と工学部の案内が開いたままだった。どちらを選んだ僕の顔もまだ見えず、どちらにも行かなかった僕の顔なら、なおさら見えなかった。

進路希望調査票には、二つの説明会の日付が残っていた。第一志望はまだ空欄だった。受信箱には、前日に届いた二通の確認メールが並んでいた。僕は余白へ小さく「見てから決める」と書いた。

昼過ぎ、母が五平餅を四本買ってきた。

「終戦の日だからっていうのも変だけど、おじいちゃん、食べたかったんでしょ」

それが記録ではなく、家に残った話だということを、母はもう言い足さなかった。僕も尋ねなかった。四本では八人に足りないことだけは、資料がなくても分かった。

袋から出し、魚焼きの網^{あみ}で温め直した。味噌が泡を作り、端が黒くなったところで火を止めた。一本は仏壇へ供え、母と僕で残りを食べた。熱い味噌が上顎に貼りついた。甘さのあとに苦みが来て、最後に少しだけ塩辛かった。

皿には平たい串が四本残った。洗って水気を拭

き、机の上に並べた。二本を横に、二本を縦に重ねる。指を離すと、隙間が広がって形が崩れた。縛るための棒も、身体を載せる幅も足りなかった。

何度向きを変えても、筏にはならなかった。

「やっぱり、八本ないと駄目か」

声に出してから、仏壇の方を見た。

お盆に用意された^{なす}茄子と^{きゅうり}胡瓜の脚が、四本ずつ畳へ踏ん張っていた。僕は手を伸ばしかけ、やめた。あれは筏のための棒ではない。帰ってくるものと、帰っていくものの足だった。

足りない四本をどこかで見つけられるかは分か

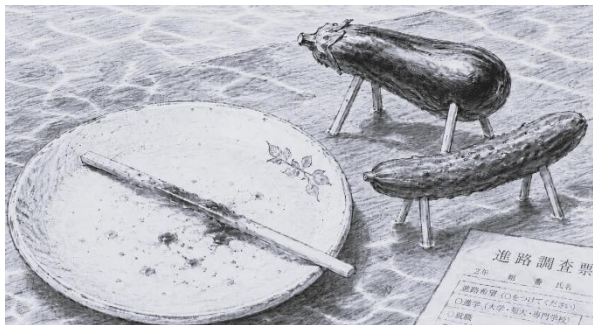
らない。机の上の串は、完成しない形のまま残した。

その向こうで、遺影の祖父と目が合った。

左の眉の上は、光の加減で白く見えた。そこだけ見れば、傷なのか、写真が剥がれているのか判別できなかった。けれど、少し顎^{あご}を引いてこちらを見る目を、僕は知っていた。

皆既半影月食が沈む明け方、筏の端から僕を見返した日本兵も、同じ目をしていた。

出口のない筏の上で、十七歳は五平餅の夢を見る



謝辞

本作は、祖父である佐藤^{はじめ}一の体験を妹が小学校の作文に残したものに、次の書籍等によって、情報を確認し、また新たに分かったことを追加して作成したものです。その過程では、関係する出版社、公的施設の方の助力を頂きました。

ここに深い感謝を申し上げ、戦争と真摯に向き合える社会が後世に残ることをお祈り申し上げます。

- 艦長たちの太平洋戦争 全 新装版: 51 人の
艦長が語った勝者の条件 佐藤和正
- 「回天」その青春群像: 特攻潜航艇の男た
ち 上原光晴
- 人間魚雷 回天 第2版 ザメディアジョ
ン
- グアムの戦い GUAM FIGHTING (太平
洋写真史 PHOTOGRAPHS OF THE
PACIFIC WAR) 平塚征緒
- Catalog of Lunar Eclipses: 1901 to 2000
NASA

二〇二六年八月七日 初版発行

著者 佐藤慎一

© 2026 Shinichi Sato